



三島善太郎  
(享年四五)  
三島燈子  
(二二)  
三島仁太郎  
(四三)  
菱野和美  
(二六)  
松下  
(二三)  
死神六六六号  
(?)  
三島依子  
(享年三五)  
医者

三島商会の会長。  
善太郎の娘。  
三島商会の社長。 善太郎の弟  
仁太郎の秘書。  
葬祭センター担当者。  
善太郎の魂を担当する死神。 本名小金井智久。  
善太郎の妻。※写真のみ。  
医者。※声のみ。

# 一場

春から夏へ移り変わる季節。一番体調に気をつかう時期ですね。

とある地方都市から約二十キロ北へ行つたり来たりした所にある山と海に囲まれた土地

「鹿ノ谷村」

ここがこの物語の舞台だつたりするかもしれません。

暗転中です。

音楽が始まります。

音楽・二十三秒・

照明・メロディーの挿入にあわせて、台の上におかれている善太郎の

遺影だけがフェードインで照らされます。

遺影の善太郎は、免許証の写真のようリラックスしているが緊張したような表情です。

音楽・四十六秒・

善太郎の娘、澄子が入つてくる。

澄子がその遺影を手に取ると同時に地明かりがゆっくりとフェードイン。

澄子は、その遺影を悲しみでも哀れみでもない表情で見つめているようです。

仁太郎が手帳を見ながら入つてくれればいいじゃないですか。

それと同時に和美が名簿を持って現れ、仁太郎にこれでいいかと尋ね、

了承を得ると出て行きます。

音楽・一分十三秒・フェードアウト

うろうろしている仁太郎。

そこへ、電話を手にした和美が入つてきます。

和美 「社長、禅水寺のご住職からお電話が」

仁太郎 「はいはい。いや、ちょっと後にしてもらえるか。掛け直すから」

和美 「すみません、後ほど掛け直しますので」

(電話を切る) 会長の戒名の件、どうしましようかって

仁太郎 「ああ、そうか。早いところ決めないとなあ。

戒名つて、お寺に頼むと高いんだろ?」

和美 「まあ:ピンキリでしようけど

仁太郎 「名前つけるくらいでなあ、もう」

和美 「最近は、インターネットで自動的に戒名決めてくれるやつもあるみたいですよ」

仁太郎 「おお! そりや便利だな! スマホからも行けるのか?」

和美 「やつてみます! えーと、三島:・善太郎:。戒名は、生前の名前から一文字使う

仁太郎 「じゃあ、『善』だな」

和美 「院号:・ナントカ院つてやつですね。ここは檀家になつてお寺に由来する場合もあ

る」

仁太郎 「じゃあ、禅水寺さんだな」

和美 「最後は、故人の人柄を一言で……これはもう、『善人』ですよね! いい人でしたか

慈善事業にも積極的だつたですし」

仁太郎 「まあ、お人好しというか、天然というか」

和美 「あ、しました！…」

『善禪院善善慈居士（ぜんぜんいんぜんぜんぜんじ）』…』

仁太郎 「アニメか？」

「何よ、つかえないソフト」

「あの…」

和美 「あ…」

「あ！ごめんね澄子ちゃん！ ふざけてるわけじゃないのよ」

澄子 「わかつてゐる。いいんじやない？名前。ゼンゼン…ゼン…覚えやすくて」

仁太郎 「全然覚えとらんじやないか」

澄子 「葬儀屋さんに任せたんでしょ？」

仁太郎 「そとは言つても、こつちで準備せなならんことも多いんだよ？」

あ、もう、こういう段取り苦手なんだよ。

あ、そうだ！兄貴に相談してみよう

和美 「そうですね！ 会長 こういう段取り得意ですもんね」

仁太郎 「何たつて元町内会長だしな。じやあ兄貴に…」

仁太郎と松下は仁太郎の遺影に目をやる。

仁太郎 「ああ…そうか…」

和美 「そうでしたね」

仁太郎 「ちょっと疲れてるのかな」

和美 「そうですよ。あとのことは、会長に任せれば」

仁太郎 「そうだな！ 兄貴の葬式だし、兄貴に仕切つてもらえばいいか」

仁太郎と松下は仁太郎の遺影に目をやる。

仁太郎・松下 「ああ…」

和美 「落ち着いてください！」

仁太郎 「いやすまん。どうもまだ実感が…」

和美 「そうですね」

玄関から、松下の声が聞こえます。

松下（声） 「失礼します」

和美がその声の方へ出て行きます。

仁太郎 「しかし、人間つてのはわからんもんだね。兄貴と会社始めて、二十年ちよい。

（隣の部屋に視線）四五か…」

「仕方ないじやない。あれでも人間だつたんだし」

燈子

「あ、でも人間だつたんだし」

仁太郎 「あれって……」  
燈子 「最後まで面倒かけさせて。全く」

和美がやつてくるじやありませんか。

和美 「社長、葬祭センターの方到着されました」

仁太郎 「そうか、お通して」

和美 「会長にご挨拶してから。と」

仁太郎 「そうか……ふう……すまんね。やることが山積みで頭がついていかんよ」

和美 「大丈夫……ですか？」

仁太郎 「和美さんこそ。ろくに寝てないんだろ？」

和美 「働いてる方が、気が紛れますから」

仁太郎 「（二）、三度軽くうなづいて気持ちを切り替える）……で、燈子ちゃん。

和美 「普通で。こだわるような事でもないし」

和美 「会長——お父さんから、何か希望とかは？」

和美 「自分の葬式の事なんか考えないって」

和美 「まあ……あの若さで亡くなるなんて（涙ぐむ）思つてなかつたでしようからね」

和美 「もし自分で葬式出したら。とことんD派手にしろって言うだろね」

和美 「お祭り好きでしたからね」

燈子 「最後くらい大人しくしてほしいもんよ」

燈子 「燈子 遺影を確認するのです。  
その燈子に聞こえないように。」

和美 「（仁太郎に）燈子さん。まだ会長と仲悪かつたんですね」  
仁太郎 「まあ……依子さんが亡くなつてから娘一人父一人だつたしな。

難しいところもあつたんだろ」

和美 「偉そうに……。気に食わない顔。嫌な奴つてのは顔に出るもんね」

和美 「でも根は悪い人じやなかつたですよね」

仁太郎 「変わり者だつたけど、行動力は人一倍あつたな！行動力だけは！」。

和美 「だからこそ、東京の会社辞めてまで、我が三島商会をここまで

盛り立ててこられたんですよ！」

和美 「どうだか。人に指図されんのが嫌だつただけなんじやない？」

仁太郎 「ノーコメント」

和美 「あいつは、物事を深く考えずに行動して、悪運強く生きたクズよ」

仁太郎 「あいつって……お父さんもあれで……」

和美 「善太郎の事をお父さんなんて呼びたくない」

仁太郎 「いや、だからね……」

そこへ、葬儀屋 松下の声が聞こえてくるんです。

松下 和美 「ごめんください」  
「あ、どうぞお」

松下 入つてくるじやないですか。

「失礼いたします！」

「お世話様です」

「はい！ あ、すみません」

「どうぞお座りください」

「あ、はい。すみません！」

松下 その場に正座するのです。

「座布団ありますから」

「（立つ）あ、あの、すみません」

「座つてください」

「あ、はい。すみません！ あの、すみません」

「あ、はい。すみません！」

「あ、はい。すみません！」

「落ち着いてください」

「お見苦しいところを失礼しました。私『ヴィエンダール葬祭センター』の

松下と申します」

名刺を取り出して渡す松下さん。

和美

「ヴィエンダールって、結婚式場じやありませんでしたつけ？」

「この春から、ブライダル部門の系列で葬祭部門ができたんです」

「へえ？」

「実はこの前までブライダルの担当だったんで。

すみません。まだこっちの現場が…」

「そうなんですか。松下さんって方はまだいらっしゃるんですか？」

「はい。松下はブライダルの方で…お知り合いなんですか？」

「以前お会いした事が。元彼と式場の相談しに行つた事があるんです」

「あら！ そしだつたんですかあ！ それはそれは…元彼？」

「まあとにかく！ 突然の事でこっちも何をどうしたもんか…。

「一つ宜しくお願ひします」

「心中お察しします。お辛いでしようか、早速葬儀のご相談のほうに」

「構いませんよ」

松下 燈子 「カバンの中からパンフレット類を取り出す。

松下 「（緊張）えー…あの、えー…（パンフレットを見ないで）この度は…」

突然の事で、お悔やみを申し上げます

「（お辞儀）」

「（パンフレットを見て）このめでたい行事に」

「？」

「私どもの喜びもひとしおでござります」

「あ……？」

「それでですね。まず登場の仕方は如何致しましょう？」

「登場の仕方？」

「オプションで神輿に担がれて入場なんてのもありますし、

少々お値段は張りますが、空中からブランコに乗つてくるですか、先日は捕らわれの花嫁をターザンスタイルで助けに来ると言う演出……」

「あのちょっと。何ですかその葬式」

「え……あらヤダ！カタログが違う。すみません。

こちらは結婚式のカタログでした！」

「結婚式……脅かさないで下さい」

「すみませんッ！これ先月まで使つていたもので！ホントすみませんッ」

「あの……本当にターザン――」

「では改めて確認させていただきます」

松下 軽く咳払い。

「喪主は……」長女の、三島燈子さん  
「はい」

「世話人の方が……」

「私は……」

「三島仁太郎さん。亡くなつた善太郎さんの弟様ですね」

「あと一応、会社関係ということです」

「秘書の菱野です。経理なんかのお役に立てればと」

「大体費用としては幾らくらいなんでしょうか？」

「そうですねえ。相場としては、大体二百万前後つて所でしようかね」

「二百万……」

「まあ、そんなモンでしょう。母ちゃん時も結局香典でトントンだつたしな」

「ご香典は、まあ親戚の方が一人一万円、会葬者の方が一人五千円くらいの見通しですかね。ご自宅での密葬というお話でしたが……」

「ええまあ、社葬でやつても良かつたんですが、どうせ自宅も兼ねとるんで」「無駄に広いしね」

「なるほど。当時は当社の方から音響も用意できますので、最近は、BGMを流す方式も流行つてますし、選曲もお任せできますよ。進行はプロが行いますんで」

「お願ひします」

「祭壇の方は、（カタログを開いて置く）シンプルにと言ふ事でしたので、こちらのセットでよろしかつたですね」

「はい」  
「まあ他にもラインナップとしては色々種類がありますが。  
何かありましたらどうぞ遠慮せんくださいね。」

うちではできる限り、故人の方の意思を尊重しようと思つておりますので

「いえ、特に。ちやつちやと済ませたいので」

「（カタログを読んで）ほお…、色々あるんですねえ」

「この、石棺て…石の棺つてことですよね？」

「エジプトマニアの方から依頼されて、半分シャレで用意してみたんです。

御影石と大理石で

和美 「使われた事あるんですか？」

仁太郎 「いや、これじや火葬場で燃やせんだろう」

松下 「それ以前に、持ち運べませんでした。一個で、一トンありますんで。

いやー、うつかりうつかり。あはははは…あ…失礼」

和美 「この赤い派手なのもどうなんですか」

松下 「はい。こちら総ヒノキ製で、全体に朱色の輪島塗を施した贅沢な一品となつております」

仁太郎 「（桁を数える）十、百、千…こんなに！？」

松下 「通称『フェラーリ』と呼ばれています」

燈子 「あいつは軽トラで十分です」

松下 「ご結婚もご葬儀も、他にはない特別なおもてなしで。というのが社訓ですから。ちなみに今年から、ご結婚の際にご葬儀の先行予約もできるシステムになりましたね。」

こちら『死が二人を分かつまでキヤンペーン』となつております

仁太郎 「ほ…ほ…（和美に）大丈夫なのかこの会社

和美 「住職さんのご紹介ですか」

松下 「あと遺影についてなんですが…」

仁太郎 「いただきました」

仁太郎は燈子が磨いていた遺影を手にして、棚の上に飾ります。

仁太郎 「（眺めながら）…すごいですねえ。本当にスース着てるみたい」

「本當にとは？」

「社員証の写真だつたんです。作業服着た」

「まじめなお顔のが、それしかなくて」

「最近は合成で何でもできますからねえ」

松下 カバンから封筒を取り出します。

「あ、お預かりしていた他のお写真です。お返しします」

「すみません。慌ててたものでゴチャゴチャなままで」

「いえいえ。楽しそうなお人（思い出し笑い）ふははははははは

「松下さん？」

松下 仁太郎 笑いが収まらなくなっています。封筒から写真を取り出しながら。

仁太郎  
和美 「（和美に）どんな写真送ったの？」  
「とりあえず適当に…」

仁太郎と和美 同時に写真に目をやつた瞬間のことです。

三人の笑い声はやがて「くくくくくくくく…！」というものになります。松下さんがその輪に入ろうとして写真に手を伸ばしますが、燈子に取られて肩透かしです。切ないね松下さん。

燈子 「（咳払い）」

笑い転げていた三人も、不謹慎だつたと思つたのか、冷静に戻ります。咳払いしたりネクタイを直したり。ありますよねこういうこと。

「ところで、仁太郎様。弔辞の件なんですが」

松下 手紙を取り出す。

仁太郎 「ああ……こういうの書いた事がないもので。こんな感じでいいのかどうか」  
松下 「こここの部分なんですが」  
仁太郎 「えー・両親が離婚し母と暮らす事になつてから、兄は私にとつて、

「お気持ちはわかるんですが、あまり離婚とかは、入れないほうがよろしいかと」

松下 仁太郎 「うーん。。。兄は兄でした」  
「書き直しましょーか」

「されど、先にご遺体の処置についてご説明させていただきます」

三人は、隣の部屋へ話し合いながら移動していく。

和美 「あの、本当にターザン……」

床には、開いたままのカタログと写真の入った封筒。

## 一一場

死んだはずの善太郎が、不思議そうな顔をしてやつてくるじゃないですか。簡単に備えられた自分の遺影を眺めるのです。家族の写真を、触ろうとしても触れずに複雑な表情をしています。

善太郎 「……妙な気分だ」

善太郎 自分の遺影をまじまじと見つめます。

善太郎 「……これが俺の遺影！？ 辛気臭いなあもう」

善太郎 その中の一枚、依子さんの写真に眼を向ける。

善太郎 「依子……、俺どうしたらいい？」

善太郎 床に置いてある封筒を手に取り、中から一枚の写真をとりだします。その瞬間のことです。

善太郎 「だはははははははは！ 何だこの顔ツ！ いひひひひひ！」  
「どこのバカが——俺か……！」

やがて、カタログに気付いてしまいます。  
葬祭のカタログに描いてあるキヤツチフレーズを読みます。

善太郎 「『人生最後の旅立ちに……』……。そうか、やっぱり俺死んだのか……」

善太郎 カタログをめくります。

善太郎 「ふーん……ん？……フェラーリ？」

そこへ、和美、仁太郎、葬儀屋の話し声が聞こえできます。

仁太郎 「じゃあ、細かい事は菱野と相談していただいて」

松下 「一応、世話人の方には方針を決めていただきたいので」

仁太郎 「ところで……喪主についてなんですかね。ちょっと心配で」

松下 「お若いのにしつかりされてますねえ。大抵は皆さん取り乱されていて、

いつも苦労するんですよ」

仁太郎 「ああ……その……亡くなつた兄と彼女はちょっと、仲が……ね」

松下 「よろしくなかつたんですか？」

仁太郎 「ええまあ。父親がちょっとラリパッパだつたせいか、あの子も苦労してね」

松下 「ユニークな方だつたみたいですね」

仁太郎 「というより、ちょっと困つた人でしたね。こんなときに言うのもなんでしょうが」

仁太郎 「何だと！？」

仁太郎 「トラブルメーカーと言うか。ま、商売人としてはいい面もあつたんでしょうが」

善太郎 「仁太郎：お前、一人で飲んだときにお兄ちゃんとやつてこれでよかつたつて泣いてたじやないか！」

仁太郎 「実際、生前は兄の尻拭いでだいぶ苦労したものですね」

善太郎 「なーにーをおう！？……その口を縫い付けてやろうか！」

仁太郎 「——？」

仁太郎 「どうかしました？」

松下 「いや……今、急に不愉快に……」

和美 「会長が怒つてらつしやるんじやないですか。

仁太郎 「あんまり悪口言うと化けて出ますよ」

仁太郎 「いやあ、兄貴の事だもの。逆に狼狽てるんじやな？」

仁太郎 「——！」

仁太郎 「そうそう、いつだつたかね……（話し続けるマイム）」

仁太郎 「言つてくれるじゃないか仁太郎……！」

仁太郎 「あつはつはつはつは！」

仁太郎 「ごめんなさい。こんな時に不謹慎ですけど、それはいわゆる、アレですかね？」

仁太郎 「アレって何ですか？」

仁太郎 「何ですか！」

仁太郎 「やつぱりアレですよね？」

仁太郎 「そう、バカ」

仁太郎 「失礼ですよ、まだ隣で寝てるんですから」

仁太郎 「違いますよ、寝てるんじゃないの。死んじやつてるの！」

仁太郎 「わーはつは・」

仁太郎 「（間髪入れず）これは笑えないわね」

微妙にしんみりする三人。

和美 「それで、当日までの概算をざつと計算してみたんですけど……」

何かを話し合い始める三人（マイム）

善太郎 「チクショウ……、どいつもこいつも好き勝手言いやがつて……」

善太郎 話を続けている三人の間に入り、見えていないのをいい事にはしゃぐ。全く反応しない三人。ここは見えてるけど見えない演技をする役者さんと、何とかして笑わせてやろうとする善太郎役との戦いですでの存分にどうぞ。がんばる善太郎。

その努力が無駄に終わって

和美 「じやあ、そういう事で」

松下 「解りました。あ、ちょっと住職さんともお話ししてきますんで」

和美 「じやあ。私ちよつと連絡してきます」

二人が出て行つて、残つた仁太郎。  
善太郎の遺影をまじまじと見つめる。

善太郎 「弟よ！ 兄ちやんは悲しいぞ！ お前が俺のことをそんな風に思つてたなんて！」

仁太郎 「……仁太郎？」

善太郎 「ごめんな……。凄く悲しいんだけど……。悪く思わないでくれ」

善太郎 「どういうことだ」

仁太郎は遺影を手に取ります。

仁太郎 「全く……、タイミングよく死んでくれたもんだ。兄貴」

善太郎 「……仁太郎？」

仁太郎 「ごめんな……。凄く悲しいんだけど……。悪く思わないでくれ」

善太郎 「どういうことだ」

そのとき、入り口側で、和美が星明子のように覗いています。

和美 「社長」

仁／善 「（同じ動きで飛び退く）ぎやああ！」

「なんだ、和美くんか。脅かさないでくれよ」

善太郎 「……（兄弟だなあ）」

和美 「本気じやないですよね」

仁太郎 「何が？」

和美 「本気で澄子さんの……、遺産を奪うんですか？」

仁太郎 「人聞きの悪いこと言うな。あの子がしつかり落ち着くまで管理するんだ」

和美 「でも……」

仁太郎 「君もわかつてたるだろ？ 今の三島商会の状況を。不渡りとは言わないが、苦しいことにはかわりない。

せつかくまとまつた金が入つてくるんだぞ？」

和美 「だからって、父親が娘に残すお金を」

仁太郎 「大丈夫だつて！ このビジネスが軌道に乗れば、何倍にだつてして返せるんだから」

善太郎

「仁太郎」

「じやあ、本気で会長の土地も売るおつもりなんですか」

善太郎 「土地？ 俺の土地つて三島神社のことか？」

仁太郎 「あんななんの金にもならない土地、持つてもしようがないだろう」

善太郎 「馬鹿野郎！ あの神社は…」

和美 「相手の明石建設には、色々と良くない噂も…」

善太郎 「明石建設つて、汚職でニュースになつたところじゃないか」

仁太郎 「別に三島商会がどうにかなるわけじゃない。土地を売り抜くだけだ」

和美 「ですが、あの森は会長が…」

仁太郎 「ゴミ同然のあの森が売れるんだぞ？ すごいぞー！」

本格的なリゾート施設に生まれ変わるんだから！

温泉に、スポーツジム！ ゴーカートのサーキット！

明石建設は行政にも顔が聞くからな。

和美 「やがてはこの街も、もつとポップで先進的な名前に変わつて…」

「燈子さんが何と言うか」

仁太郎 「あの子は父親の意見なんか聞かんよ。丸め込むのは簡単」

和美 「仁太郎…」

仁太郎 「ビジネスチャンスはね。義理や感情に振り回されちゃつかめないのさ」

「社長…」

和美 「これでも、私はサイドビジネスで飲食店を三件も警備した経験があるからな」

仁太郎 「全部潰れたけどな！ つていうかそのせいで会社が赤字になつたんじやないか！」

善太郎 「社長。今ならまだ間に合いますから、考え直してください。」

和美 「会長だつてこんなこと、悲しむはずです」

仁太郎 「…兄貴は死んだんだ。もういないんだよ」

和美は無言のまま立ち去ります。

仁太郎 壁に飾られている写真を眺めながら

仁太郎 「昔から、兄貴はいろんな人に好かれててさ、

うちの会社も兄貴のおかげでお大きくなつたようなもんだ。

もし生きてたら、俺のやることに反対するだろ？

いつだつて兄貴が正しいんだもんな？

面倒見てくくれてさ…俺は、本当にアンタが邪魔だつたよ

善太郎 「…」

仁太郎 「悔しいだろ？ これからは全部俺の物だ。」

会社も、家族も。俺が見ていくんだ…」

仁太郎 奥の部屋へ出て行く。

二三場

善太郎  
——ええ……？ 何今の……。  
何今の「レスボス感」

そこへ燈子が入ってきます

上は乗せます

善太郎の顔を穴が開くほど見つめる燈子。そりやあ驚きますよね。

燈子  
—  
(首を激しく横に振る)  
—

「見えない！」

善太郎「見てるよな」  
「色付見えな、！」

善太郎 「ほんとに？」

善太郎「ほら見えてる」

卷之二

# 善太郎 勝利の笑み

「何……？ 何なのよ……！？」

「何でアンタ、ここにいるの！？」

善太郎 いや 備ん家だし  
「そ、う、」や、な、く、て！ ゴ、つ、て！ …… ゴ、つ、て！

（善太郎が死んだ事のアピールジエスチャード）

「死んだでしょ!! 死んでる!! 死んだでしょ!!」

善太郎 一大騒ぎするなよ。  
 たいたした事じやないだろ

「アンタまさか、アレなの？」

善太郎 云々で伺が  
「忍れど、な、サジアつぱりアノは、

善太郎 だからアレとか言うなよ

善太郎 「……ババと呼びなさい」

燈子 「嘘でしょ……本当に幽霊……？」  
善太郎 「まあ、肉体を超えた存在を妻

(格好つける) そうツ・・・幽靈デス☆」

善太郎 「フツ！」

善太郎 「？」

善太郎 「？」  
燈子 「なんか、生き生きしてる」

善太郎「何だよ、人間死んだら生き

それとも何か？人は死んだら死に死にしてなきやいけないのか？

（キレる） 何だ死に死にって————！！

燈子 一 知るか——ツ!

言ひ争う二人。

「燈子さん？」  
「——あ……つ！ 和美さん」  
「あの、お話ししたいことが……  
和美さん！ そこ！」

無駄に可愛らしく手を振る善太郎。

「タンスじやなくてその……、見えないんで

和美善太郎「俺！」

和美「写真ですか？」

「ああ、会社設立記念に社長を池に落とした後の写真ですね」

善太郎　お、探偵して全治一週間だいじょ

和美 善太郎 「それは、町内の盆踊りでやぐらから社長を突き落とした時の写真ですね」

「本当に見えないの？」

「（善太郎に）あんた何やつてんの！」

善太郎 嬉しくて【い】  
和美 「登子さん。突然こんな事になつて…私、会長が亡くなられたなんて…」  
（立ぐ）

まだ実感が…！」

善太郎 「（泣く）私もです」

和美 善太郎 「色々、お辛いでしょうけど。（手を取る）気をしつかり持つて下さいね」

和美 燈子 「そうだぞ！」

和美 燈子 「（善太郎に）うるさい！」

和美 燈子 「えつ」

和美 燈子 「いや、和美さんの事じやなくて——」

和美 燈子 「そうですよね……。こういう時に優しくされるのって、逆効果ですよね」

和美 燈子 「そうじやなくて……」

和美 燈子 「ごめんなさい。私、燈子さんの気持ちも汲み取れなくて」

和美 燈子 「マズいぞー、この娘泣き出すと止まらないからな」

和美 燈子 「あ、あのね和美さん……」

その言葉を振り切つて、隣の部屋へ駆け込む和美。

善太郎 「あーあ」

善太郎 「何しに出てきたのよ。善太郎！」

善太郎 「トーコ。自分の父親を名前で呼ぶもんじやないぞ」

善太郎 「幽靈でもなんでもいいから、とつとと消えて！」

善太郎 「燈……」

燈子 「いつもそう……、いてほしくない時にばつかりつきまとつて！」

私はアンタの顔なんかもう見たくないんだよ！」

善太郎 「どうしたんだ……」

燈子 「生きてる間は好き勝手に生きて、勝手に死んで、後始末で大変な時に死んでまで

私の人生に入り込まないで！ どつか行つてよ！」

善太郎 「……（ため息）。そうか、解つたよ。迷惑かけたな。自分でも死んだって

事が認められなくて、せめて最後に一目お前の姿が見たいと思つて

来たんだが……。すまなかつた」

善太郎に背を向けている燈子。

燈子 「（移動する）ちゃんと消えるよ。じゃあ、元気でな」

燈子 出て行く。

しばらくして、燈子が振り向くと、善太郎の姿は無い。

燈子 「善太郎……」

辺りを見渡した後、善太郎の遺影を手にする。  
少しだけしんみりする燈子。

そのとき、突然善太郎が戻つてくる。

善太郎 「探せよおおつ！」

燈子 「やつぱり！」

善太郎 「もつと、追うとかしろよ！」

燈子 「冗談じやない」

善太郎 「何だ何だ。せっかく、お前の事が心配で戻ってきたのに、

「ずいぶんな態度じやないか」

燈子 「自分がしてきた事考たら、いくらアンタだつて解るでしょ」

善太郎 「俺が一度でも、お前に『勉強しろ』『早く寝ろ』『テレビを見るな』

なんて言つた事があつたか？俺はいつだつて、

お前を尊重する父親であろうと努力したつもりだぞ」

「ただの恥よ！」

燈子 「そこまで言う事無いだろ」

燈子 「小学校の頃、私のお年玉で競馬行つて大負けしてくるし」

善太郎 「倍にして返そそうと思ってたんだよ」

燈子 「お母さんが亡くなつてからはもつと酷い。女遊びは激しくなるし」

善太郎 「女遊びつておい。やだねー若もんは、何でもかんでもやらしい方向に考える」

燈子 「中学の時は、英語の家庭教師に来てた大学生と一晩中飲んで説教するし。

善太郎 「しかもあの人、学校やめちやつたじやない」

「だつて、本当は俳優になりたいんですつて言われたから、自分の信じる道を行きなさいつて諭しただけだよ」

燈子 「高校の時は三者面談で担任の先生を口説こうとするし」

善太郎 「だつて綺麗だつたんだもんつ！いやー、あの涼しげな目元がなんとも…」

燈子 「大学入試の時は、景気付けしてやるからつてアンタの作つた料理食べたら、

「食中毒にかかるし…だから落ちたのよ！」

善太郎 「悪かつたつて。熱通せばどりあえず大丈夫だと思つたんだけどね」

燈子 「とにかく。アンタは…」

そこへ仁太郎が入つてくる。

仁太郎 「燈子ちゃん」

燈子 「は、はい！」

仁太郎 「和美さん見なかつた？」

燈子 「あ…えーっと」

仁太郎 「泣一かした！、あそれ泣一かした！あよいしょ…」

燈子 「（善太郎に威嚇）シャーツ！」

善太郎 「…せめて何か言葉を使えよ」

燈子 「（仁太郎に）何ですか？」

善太郎 「ハイ無視ツ！」

仁太郎 「ちようどいい、ちよつと話があるんだけどね」

燈子 「話？」

「このままだと燈子ちゃんが相続することになるわけなんだが、お父さんの遺産やら保険金のことでの、

燈子 「はあ」

仁太郎 「どうだろう…それなりに大きなお金で管理も難しいし、

相続税は下手をすればかなり持つて行かれて、マイナスにもなるかもしれない。

そこで、一旦お父さんの土地や財産を、会社名義にさせてもらえないか」

燈子 「会社に？」

仁太郎 「そう、特にお父さんが三島神社を立てた土地については、いい話が来てるんだ」

善太郎 「燈子！耳をかすな！絶対に失敗するから！」

仁太郎 「実は、あの土地を最高級リゾートに生まれ変わらせようって計画があつてね！」

善太郎 「けつ：：なーにがリゾートだ」

燈子 「それがおじさんと何の関係が？」

仁太郎 「そのリゾート計画に、三島商会と企業提携をしないかって話があるの！」

善太郎 「よくある話じやないか。どうなるか予想ぐらいつくだろう」

仁太郎 「組織の質はリーダーで決まるもんだ。私なら、会社をもつとより良い形に出来る。亡くなつた兄さんも、天国でそれを望んでいるはずだ」

善太郎 「どーだか」

仁太郎 「燈子ちゃん！必ず！三島商会をもつとビッグな会社にしてみせるから」

燈子 「はあ：」

善太郎 「よく聞け燈子。仁太郎と俺と、どつちを信じるんだ」

燈子 「（仁太郎に）がんばって下さい」

善太郎 「ノオー！」

仁太郎 「ありがとう！」

死神 「ごめんください」

死神の声が玄関から聞こえる。

仁太郎 「お前即答か！少しは俺の話を――」

燈子は、善太郎を軽くにらんだあと出て行ってしまうのです  
その後を追う善太郎。

善太郎 「（戸惑いも見える）ふ…。これでいい…。これでいいんだ」

## 一四場

仁太郎 「（戸惑いも見える）ふ…。これでいい…。これでいいんだ」

一人で悪者笑いをしている仁太郎。  
悪いです。悪い笑い方です。

仁太郎 「ふふふふ…（大笑いをしようとする）あーっは…」

そこへ突然和美が泣きながら駆け込んできます。

和美 「（大泣き）わあああああっ！」

仁太郎 「あ、あれ？ 和美ちゃん？。どうしちゃったのかな～？」

和美さんは仁太郎の腕に思いつきりしがみつきます。  
仁太郎さんは体制を崩します。

和美 「しゃちよお！ 私ダメな女なんですうう！」

仁太郎 「何で？ ていうか君酔つてるね？」

和美 「（泣きながら説明するので何を言つているのか解らない）」

仁太郎 「うん、ゴメン全然わかんない。落ち着いて」

和美 「私はただ、燈子さんの力になつてあげようと思つただけなんです。

でも、反つて彼女の神経を逆撫でしたみたいで、

これじやあ、私空気の読めないイタイ女じやないですかああっ」

仁太郎に泣きすがつてポカポカ殴る。

仁太郎 「痛い痛い痛いッ！ 解つてる。君はよくやつてる！」

和美 「私、昔から勉強もスポーツも人一倍努力して、

男にだつて負けないようになつてきましたんです」

仁太郎 「うん…、別に君の人生はどうでもいいから！

あ！ それ御供えのお酒！」

そこへ、善太郎が戻つてくる。

善太郎 「厄介な奴が来たなあ――（状況を見て）え――！？」

和美 「何？ 男つてそんなに偉いの？ 女より上だなんて決まつてるつていうんですか！」

仁太郎 「痛だだだだだだだ！」

和美 「苦しむのはいつも女なのよおおつ」

和美さんたら、仁太郎の首を締め上げて前後に激しく揺さぶっちゃいます。

仁太郎 「苦しい…！ 苦しいから…！」

和美 「社長のことも止められないし！ 私はどうしたらいいのか」

仁太郎 「だから大丈夫だつて！ 心配することないから！」

そこへ燈子がやつてくる。

燈子 「おじさん、お客様で――何やつてるんですか！」

仁太郎 「あ・いやいや、ちょっとね」

燈子 「(仁太郎に気づき) …何、まだいたの?」

和美 「(自分の事だと勘違いします) そんな冷たい言い方…！」

和美は床に突つ伏して泣きます。まるで泣んでるみたいですね。

燈子 「え? あ、いや今のは――(和美に) 和美さん? …寝てる」

仁太郎 「疲れてるんだろう…しばらくそつとしておこう…で、誰だつて?」

燈子 「さあ、小金井さんって方なんですけど」

善太郎 「あ、やべつ！」

燈子 「?」

## 一五場

善太郎 別の部屋へ隠れる。  
そこへ、喪服姿の死神がやつてくる。

死神 「すみません。突然、失礼します」

仁太郎 「どうも、失礼ですがどちら様ですか?」

死神 「あ…、私 三島善太郎さんと個人的に親しくさせていたいた者です。

この度は突然の事で…」

燈子 「どうもご丁寧に。すみません、お通夜は明日になるとと思うんですが」

死神 「(辺りを見回し) そうですか…。とりあえずお顔だけでも…」

(和美に気づく) …あの、こちらの方は?」

仁太郎 「え…? あ、ああッ、あの…(腕時計を見て) あらッ? もうこんな時間だ!  
すみませんね。ちょうどどこつち(和美的頭の向き) の方向に

聖地があるもん

死神 「…あ! そういう宗派の方なんですか?」

仁太郎 「ええまあ。あ、じゃあこちらへ」

死神 仁太郎に案内されて仁太郎の寝ている部屋へ。  
燈子は突つ伏している和美を気遣おうとします。

燈子 「えーと…和美さん? 大丈夫ですか?」

善太郎 死神から逃れられたんで一安心して、燈子の背後に忍び寄ります。

善太郎 「（低音で）泣いてたんだよ」

燈子 「わあっ！」

善太郎 「ぎやつはつはつはつはつは！『わあっ！』だつて！マジウケルンデスケド！」

燈子 「（善太郎に）いい加減にしてよ！この疫病神！」

和美 「（目覚める）疫病神！？」

燈子 「あ、起きた！」

和美 泣き出す。

和美 「やつぱり私はダメな女なのよー！」  
善太郎 「またか」

泣き出した和美に狼狽える燈子。

和美 「私、昔から勉強もスポーツも人一倍努力して、男にだつて負けないようにやつてきたんです」

燈子 「別に和美さんが悪いわけじやなくて…（善太郎に）どうしちゃつたの」  
善太郎 「彼女の悪い癖なんだよ。傷つくと酒かつくらつて自分の人生嘆くの。

悪い娘じや無いんだけどね」

和美 「私だつて、もつと素敵な女になりたかった！朝のスタバで、

カフエラテなんか飲みながらタブレット眺めるのが似合う女になりたかった。  
ソリューションって言葉とか、使つてみたかった」

善太郎 「うちじやぜつたい使わんな」

和美 「我が社では、三日に一度はソリューション…とか言つてみたかった」

燈子 「どういうこと？」

善太郎 「多分ソリューションの意味を知らないんだと思う」

和美 「でも…こんな田舎じやスタバどころか、吉野家の朝食がいいところ」

善太郎 「おいしいじやないの」

和美 「いいのよ、私はもう…（笑う）ふ…。あ、ごめんなさい。ちょっと電話してきま

す」

燈子 「（善太郎）あの…」

善太郎 「心配するな。いつものことだ」

燈子 「あんた、いつまでいる気？」

善太郎 「トーコ…冷たいなあ。もうちょっと悲しむとかないのかよ」

燈子 「悲しんで欲しいなら悲しんで欲しいなりの態度してなさいよ！」

善太郎 「マツチを、誰かマツチを買ってはくれませぬか」

燈子 「気持ち悪い！」

善太郎 「さつきから親に向かつてちょっと言いすぎなんじやないかな？」

燈子 「親つて…今まで散々放つたらかしにしておいて、  
どのツラさげてそんなこと言えるのよ」

善太郎 「放つたらかしたなんて人聞きの悪い」

燈子 「私が付き合つた彼氏の数覚えてる?」

善太郎 「いない!」

燈子 「あ?」

善太郎 「お前に彼氏なんかいない!認めない認めない!」

燈子 「何言つてんの!私だつて…」

善太郎 「(耳を抑えて)聞こえない聞こえない! いないつたらいないー!」

燈子 「私の誕生日は?」

善太郎 「え?」

燈子 「(カレンダーを指差す)私の誕生日!仕事だ仕事だつて一度も祝つてくれなかつたじやない」

善太郎 「…(カレンダーを全体的に示す)この日…」

燈子 「広いわ! ていうか、せめて見て指さしなさいよ!」

善太郎 「しようが無いだろ? 長期出張から帰つたら生まれてたんだもん! おれだつて悔しかつたよ!」

その様子を、和美がまたも見てています。  
和美にとつては燈子が一人で騒いでいるようにしか見えません。

和美 「あの、燈子さん…」

燈子 「和美さん…お酒は?」

和美 「もうスッキリしました。さつきはなんだか失礼なこと言つたみたいで、すみませんでした!」

燈子 「いえ、別に。和美さんこそ大丈夫ですか?」

和美 「ええ。迎え酒したら、良いが冷めました」

燈子 「迎え酒?」

和美 「実は、うつかりこれを」

和美は酒瓶を差し出します。

善太郎 「それは! 大事ににとつておいた斗瓶どりした大吟醸おり酒!」

和美 「お供え物だつたみたいなんですけど、つい我を忘れて」

燈子 「これ一升瓶ですよね?」

和美 「これ美味しいんですよ」

燈子 「みたいですね」

善太郎 「フルーティな香り、爽やかな酸味の中にほんおり甘み!  
炭酸がまるでシャンパンのような風味の」

燈子 「だからうるさいってば！」

和美 「あの、燈子さん。さつきからどうなさったんですか？」

燈子 「あの…実はその…、いるんです」

和美 「いるって？」

燈子 「善太郎が、今ここに」

和美 「…え、それは」

燈子 「変なこと言つてるのはわかります！でも本当なんです！ほら！」

和美 「あ…！ そうなんですか！ それは、きっと燈子さんが心配で  
出てきてらしてるんですね」

そういう和美の声は軽い。

燈子 「本当なんですってば！」

和美 「うん、信じるわよ燈子さん（熱をはかる）」

燈子 「熱なんかないってば」

和美 「うんうん。きっと社長も寂しんですね（腕を調べる）」

燈子 「怪しい薬はやつてません！」

和美 「すごいな。セリフと行動が伴つてない」

燈子 「本當ですってば！ 今だつてここに」

和美 「そうですねー。会長！ いるんですか」

善太郎 「和美くん」

和美 「会長！」

善太郎 「こつちこつち！」

燈子 「信じてくれてないでしょ」

和美 「…燈子ちゃん、私ももう一度会長にあえたらどんなにいいか。  
もっと、一緒に仕事がしたかった。話したいことも、教えてほしいこともたくさん。  
私も感じます。会長がまだここにいるって」

と、和美は話しながら、ことごとく善太郎にかぶります。  
善太郎は位置を変えますが、ことごとくかぶります。

善太郎 「（燈子に）これ（俺のこと）見えてるよね？」

和美 「社長、聞こえますか？ ああ、そうですか

善太郎 「こつちこつち！」

燈子 「あの、信じてませんよね？」

和美 「そんなことないわよ」

善太郎 「嘘をつくと、耳を触る癖変わつてないなあ  
燈子 「耳を触つてるから嘘だつて。」

善太郎 「（燈子に）これ（俺のこと）見えてるよね？」

和美 「社長、聞こえますか？ ああ、そうですか

善太郎 「こつちこつち！」

燈子 「あの、信じてませんよね？」

和美 「そんなことないわよ」

善太郎 「耳を触つてるから嘘だつて。」

和美 「……何でそれを」

「本人がそう言っています

「可でそんなこと知つて

「ああ、それは…」

「お付き合いしていたんですね」と和たせ

## 「（首を振る）一

私、結婚まで考えて、

一  
緋姫まで若えてた相手に振られて どんな底だった事かあつて  
死じやおつかなとか思つてた時に、会長と出会つたんです。

「それでこの会社に」

「何で覚えてないのよ！」

「いやほら、町内会の会合で昼間から飲んでたから」

「自暴自棄になつてた私に、会長が」

「（アリス）アリス」

卷之三

卷之三

「あれで!?」

「でももう一つ、私はその会

もう一度誰かを愛してみよ

「それで付き合うことに？」

「あいつに、似てたから

「それって…」

「わかつてます。あいつの代わりだつてことは」

「あいつって？」

大事な：死んだ大事なやつに、似ていたんですね。善太郎さんが

—ああ…そういう

三三三・三

卷之三

「へえ…、ジョン…（善太郎を見て） て言うより、おにぎりみたいですけど」「子供の頃から一緒だった、犬一

「はい、パセットハウンド。雨の中で震える会長…善太郎さんは、ジョンそつくりで」

善太郎 「あの、どういう状況だつたんでしょうか？」

和美 「本当に生き写しみたいで、特ににおいが」

「おい？」

燈子 「やだ、今会長がいらつしやるんですよ！ 耻ずかしい」

「（いないいない）」

燈子 「あ、いやその…もう消えました」

「そんな！…そんな。ひどいです善太郎さん。私を置いていくなんて、

するいです、燈子さんだけ。ねえ！何とかして

もう一度出てこられないんですか？」

「何とかって？」

燈子 「こう、何かに乗り移るとか」

和美 「そこへ、蚊が一匹飛んできます。  
思はずその蚊を叩き潰す和美さん。

和美 「…会長おおおお！」

「いやいやいや」

「うわああああん」

「あ、あの、まあ…善太郎も和美さんに倒されるなら、本望なんじや？」

「燈子さん！」

「はい！」

「社長は！ とんでもない事をしようとしています！」

「とんでも無い事つて？」

「私、止めたほうがいいでしようか？」

「それは」

「止めた方がいいですよね！」

「何を」

「社長と話し合ってきます！」

和美が仁太郎を追いかけます。

燈子 「…何が？ ヒントが何も無い…」

## 一六場

善太郎 「だから言つてるだろ？ 仁太郎の話は信用するなつて」

「いい加減邪魔しないで！」

「トーコ…お前だつて解つてるんだろ？ 自分の意見じゃないんだろ？」

「俺に反発するため下らない見栄を張るなよ」

「…見栄つて…（言葉が続かなくなる）あ…さつき、

和美さんと付き合つてたつて、どういうこと?」

善太郎 「とにかく、俺はこんな計画認めないからな  
お前が考へてるようなことはしてないから」

「……考へてない!」

善太郎 「とにかく、俺はこんな計画認めないからな

「あんたの意見なんか聞いてない!」

善太郎 「…………トーコ。俺……なんか悪いことしたかな?

俺……一生懸命やつたつもりだつたんだけさ……

「……」

善太郎 「教えてくれよ……。それが知りたくて來たんだ

燈子 「……うざいのよ。私に興味ないくせに『いい父親です』って顔しないでよ」

「トーコ……」

善太郎 「その目……学校行かなくとも、仕事しなくても、叱らないし

燈子 「叱つて……欲しいのか?」

善太郎 「いつもそうやつて、困った顔して。私の事なんかどうでもいいくせに」

燈子 「バカ言うな。お前は自慢の——」

善太郎 「お母さんが死んだ時だつて……あんたほんとに悲しんでたの?

葬式のときに全然泣いて無かつたよね?」

善太郎 「……どうだつたかな」

燈子 「あんたつて結局そういう人間なんだ。自分が一番大切で、

どんなに仲良くしてるようにしてても、すぐに忘れる。母さんの事だつて

「忘れたかつたよ」

「……」

善太郎 「そこへ、死神が堂々と現れる。

死神 「それはまずい兆候ですね」

死神 「あ、さつきの」

死神 「『こちら』の世界に物理的に接觸できるようになりましたか?」

死神 「はい?」

死神 「もういい加減いいでしょ

死神 「何がですか?」

死神 「俺に言つてんだよ」

死神 「え? ……見えてるんですか?」

死神 「ええ」

死神 「そりやそうだ。だつてこの人死神だもん」

死神 「へえ、死神……えええ——つ!?」

死神 「ああどうも、ご紹介が遅れました(名刺を取り出す)私、三島善太郎さんの担当  
をさせていただいております、死神六六六号。小金井智久ともうします」

「……」丁寧にどうも」

燈子

善太郎

死神

燈子

死神

死神

死神 善太郎 「で、三島さん。もう行きますよ！」

死神 善太郎 「もうちよつと待つてくれよ！ 今日中には帰るから」

死神 善太郎 「駄目です」

死神 善太郎 「一生のお願い！」

死神 善太郎 「あなた自分の状態わかつてますか！？」

死神 善太郎 「そこは一回死んだということです」

死神 善太郎 「だからね！」

死神 善太郎 「あの…本当に死神…？」

死神 善太郎 「え…なんか、意外と…普通

死神 善太郎 「…何か問題でも？」

死神 善太郎 「…ですか問題でも？」

死神 善太郎 「…何か問題でも？」

死神 善太郎 「死神つて普通はもつと悪魔っぽいでしょ。でもあなた普通すぎる。

死神 善太郎 「つまり普通すぎて普通じゃない。むしろありえないくらい普通」

死神 善太郎 「そうそう！ 普通は普通じやなくて普通だから普通すぎるのは普通で…ふ…

死神 善太郎 「（混乱して半ギレ）普通だッ！！」

死神 善太郎 「フツウフツウつて人を電話みたいに…。大体ね、

死神 善太郎 「アンタら人間は妙な偏見持ち過ぎなんですよ！」

死神 善太郎 「そもそも我々死神は亡くなつた方の魂を刈り取つて

死神 善太郎 「迷わないように天国まで導く農夫なんですよ！それを――痛たたたた

死神 善太郎 「（うずくまる）」

死神 善太郎 「何か？」

死神 善太郎 「失礼…胃が弱いんです。神経がちょっと…」

死神 善太郎 「うーわかっこ悪！」

死神 善太郎 「カッコわる…（自分に言い聞かせます）怒るな怒るな？

死神 善太郎 「アナタはやれば出来る子だぞー愛美…！」

死神 善太郎 「出来る出来る！ 君なら出来る！ あたしガンバッ！」

死神 善太郎 「（態度を変えます）――とにかく善太郎さん。今すぐ私と旅立つて下さい」

死神 善太郎 「そうだ、それがいい」

死神 善太郎 「だつてこいつの言つてる天国つてのに魅力ないんだもん」

死神 善太郎 「何でですか。私が用意した天国はあちらでも並以上のランクなんですよ！  
間取りも機能的だし、2LDKですよ2LDK！見晴らしもいいし…  
もうすぐ新幹線だつて――」

死神 善太郎 「ちよつと…何その不動産屋みたいな紹介の仕方」  
死神 善太郎 「ですから、三島善太郎さんに分譲される天国地区のお話を」

死神 善太郎 「え？ 天国つて分譲されるもんなの？」  
死神 善太郎 「まあ、時代の流れつて奴ですか」

死神 善太郎 「な？ 魅力ないだろ？」

死神 善太郎 「何を言いますか！」

死神 善太郎 「自然のままの公園を抱き、駅から徒歩一分の利便性！  
死神 善太郎 「南向きの日当たりを中心とした健康的な住宅郡！」

あなたのアフターライフをサポートする。  
ウエルカムツ！ おいでませツ、天国へ！」

CMを終えた死神は満足そうに善太郎たちを見る。

燈子 「…いや、そんな…『どうだ！』みたいな顔されても  
死神 「もうすぐ新幹線も通りますから！」

善太郎 「どこからどこに行くんだよ！」  
死神 「細かいことなんかどうでもいいじゃないですか！」

善太郎 「タチ悪い…！」  
死神 「じやあ善太郎さん。これ以上何が望みなんですか！？」

善太郎 「…地味」  
燈子 「は？」

善太郎 「だつて俺が死んだんだよ？ 国民の祝日にしたつていいくらいじゃないか？」  
死神 「どんだけ偉いのよアンタは！」  
善太郎 「なんていうかなあ…、暗い暗い！」

ただでさえ重い空気がさらに重くなるじゃないか

燈子 「葬式ってのは普通そうでしょ」  
善太郎 「まずこの写真！ まさかこれが遺影になるのか？」

燈子 「そうだよ」  
善太郎 「言われてないんですね？」

死神 「もつとこう明るい写真にしてくれよ」  
善太郎 「暗いじゃないの。俺はね、こう見えても周りから『笑顔が素敵な人』って言って、

燈子 「わがまま言わないので！ この死にぞこない！じやなくて！ 死んでそこない！  
死んで…生き…何…？」

そこへ、松下が出てきます。

燈子 「あの、す…すみません  
松下 「…はい」  
燈子 「すいません。ご遺体を移動させますんで、すいません手伝っていただけますか」  
松下 「わかりました」  
燈子 「すいません」

燈子 松下についていきます。

死神 「なんか…大変そうですね」  
善太郎 「俺にもあんな時期はあつたさ。無性に親が鬱陶しくなるんだ」  
死神 「やっぱり、（善太郎を見て）遺伝ですかね」  
善太郎 「…違うよ」

死神 善太郎 「いやいや！ あれはどー見たって…」

死神 善太郎 「違うんだよ」

死神 善太郎 「…え…？ (なんだん理解します)ええッ！？ それは…ツ…その…」

死神 善太郎 「(黙つて頷く)」

死神 善太郎 「…だって、高校からの知り合いだつて…」

死神 善太郎 「多分、お互いい好きだつたんだろうけど。何も無かつた。ほら、あるだろ？」

死神 善太郎 「そういう事」

死神 善太郎 「はあ…」

死神 善太郎 「俺は都会で仕事して、二十五の時にこっちで依子と再会した。

死神 善太郎 「…彼女は妊娠してた」

死神 善太郎 「まさか、それが…？」

死神 善太郎 「(黙つて頷く)…誰にも相談できなくて悩んでた。で、俺は依子にプロポーズし

死神 善太郎 「…何ですか？」

死神 善太郎 「さあ…。何でなんだろうな？ 今でも不思議に思うよ。ふふふ…」

死神 善太郎 「じやあ…本当の相手は…」

死神 善太郎 「あいつは言わなかつたし、俺も聞かなかつた」

死神 善太郎 「…の事、娘さんは？」

死神 善太郎 「なんで？」

死神 善太郎 「いや、何でつてそりやあ… (自分を指差す) 調べる事も出来ますけど」

死神 善太郎 「善太郎はただ軽く笑うだけです。」

善太郎 「女はざるいよな。『生んだときからお母さん』だもん。男は、

『父親にならなきや』いけない。…難しいんだこれが」

死神 善太郎 「善太郎さん…」

死神 善太郎 「少し、独りになつていいかな」

死神 善太郎 「…どうぞ」

善太郎 「善太郎は軽く肩を落として出て行きます。死神はしばらく複雑な顔をしていましたが、『ハツ！』つとして、

死神 「——逃げられたッ！」

死神 「そこへ、燈子が出てきます。」

死神 燈子 「あ、アンタ！」

死神 燈子 「…ど、どうも」

死神 燈子 「(死神に)とつとつ連れてつてよ！ 絶対マズい事になるから」

死神 燈子 「確かにマズいですね… 善太郎さんのこの世に対する執念が強くなつてきている。」

「このままでは、あの世に行く事がきずに不成靈となつて、最惡の場合悪靈化してしまうかも」

燈子 「なんでこっちに連れてきたりしたのよ」

死神 「それがその、ちよつと成り行きで人生相談みたいになつちやつて、三途の川の屋台で」

燈子 「三途の川に屋台…」

死神 「うまいんですよ、人の懐に入るのが。さすが経営者ですね。で、いろいろ悩みを聞いてもらつてるうちにうつかり許可しちやつて。娘が心配で仕方がないから、最後に一度だけ合わせてほしい、きつと悲しんでるからつて」

燈子 「蓋を開けたら暴走じやん」

死神 「あああッ。私つてなんでこうダメなんだろうなあ！イタタタタ…胃が。ああもう…死にたい」

燈子 「それはあんたが言つちやダメでしょ」

死神 「まあ、捕まえるのも方法ですが、本人が満足すれば勝手に現世から消えるので、何か、思い残したことがあるんでしよう。あなたとの事とか」

死神は、意味ありげに燈子を見つめます。

燈子 「……私の事を見なかつたのは、善太郎のほうよ」

死神 「どいうと？」

燈子

「私、中学ぐらいからあんまり人生うまくいってなくてさ、高校もロクに行かなかつたし、仕事も…。ま、嫌な事もあつたからさ。でも、善太郎は私の事せんせん叱らないの。ただ、好きに生きればいいって言うだけで」

死神 「それは、燈子さんの事を信じて いるからじや」「違うわよ。ただ興味がないだけ」

燈子 「そんな事」

死神 「三島依子つて知つてる？ 私のお母さん。もう十年前にそつちに行つたけど」

燈子 「私の担当ではなかつたので」

死神 「心臓が弱くてね。最後はいろんなチューブに繋がれて、でも眠るように病院で。その時見ちやつたの。お母さんの血液型。気にした事なかつたけど。善太郎は…」

死神 「B型ですね？」

死神と燈子は見つめあつてうなづく。

燈子 「私は〇型で、お母さんはAB。・・私たちは、本当の家族じやなかつた」

死神 「・・・」

燈子 「あいつ、知らないと思つてるんだろうな。ほんと私の事見てないんだから。わかる？ 私の事なんか興味ないのよ。」

その証拠に、お母さんが亡くなつてからずっと、私と話なんか・・・」

死神 「うわ」

燈子 「え？」

死神 「うわ・・・！」

燈子 「何？」

死神 「あ、いやその・・・どうしましようかね？」

燈子 「私こつち、あんたそつちね！・・・不思議ね、あんなやつでも、死んだらちよつとは悲しいのかなと思つたけど、全然そんな事ない。やっぱり他人だからかな」

死神はぶつくさと言ひながら出て行きます。  
後ろに残された死神さん。

死神 「うわあ・・・。ええ・・・？（いろいろ考えを巡らせますが、ややこしさに気づく）

あちやあ・・・えらいところに来てしまつた。イタタタ・・・ああ、胃が」

死神はぶつくさと言ひながら出て行きます。

## 一七場

入れ替わりに電話をしながら仁太郎がやつてきます。  
手には一冊のファイル。

仁太郎 「はい、はい。ええそなんです。名義変更について書類はまとめていますので。

そうなんです、これから通夜の準備が。

：いえそんな、わざわざ来ていただく事は、はい・・・ああ、下見も兼ねてですか。  
わかりました（電話を切る）」

仁太郎は、ファイルに目を通します。

仁太郎 「あとはこれを・・・」

その時、ファイルのページから写真が溢れ落ちます。  
仁太郎はその写真を拾い上げます。

観客には見せませんが、これは会社を始めた頃の仁太郎と善太郎なのです。

仁太郎 「……」

ここから、当時の回想にそのまま入ります。

善太郎 「会社やりたい？」

兄貴もソーラー房で走って「ニーニーしてるくらいだら」「フラフラってなんだよ」

仁太郎「再就職また決まってないんだろ? な! どう? 善太郎「何の会社だよ」

仁太郎「ひまわりの種だよ」  
善太郎「種?」

仁太郎 「ひまわりの種は、健康食品として優秀なんだ！」

鹿野谷村と一緒に事業する事になつたんだ

善太郎  
「懐かしいな。昔よく遊んだな」

善太郎 「けどさ、金はどうすんだよ」  
二太郎 「会社辞めの人間が三人で起業

俺と、兄貴と、東山の小暮さん」

それは脚下アキラマでなんが変わったか? 小暮は

仁太郎 「じゃあ、どうするんだよ。もう一人」  
喜太郎 「あてぼよ、事かな、一

仁太郎 「あてつて？」

仁太郎「は？」

# 「結婚！？」

善太郎  
仁太郎  
「いや、  
まあ……」  
お前と  
備と  
備の嫁さん  
これでいいだろ？」

子供産まれるから」

仁太郎「子供」  
善太郎「そりや夫婦ですもの、子供ができたりもしますわよ」

「子供出来たって、何でたよ?」「何でってお前、保健体育で習!」

善太郎 「……ま、そういうわけだから。あ、あとさもう一つ。

会社のついでに、ここになんか作ってくれよ」

仁太郎 「何かって？」

善太郎 「神社とか。いいな。三島大社」

仁太郎 「神社つて」

善太郎 「あと、社長はお前な？ 僕会長」

仁太郎 「はい？」

善太郎 「俺、社長業とか書類とにらめっこするの苦手だから。

お前得意だろ？ そういうの」

仁太郎 「そんな適當な」

善太郎 「よし、やろう！ 会社」

仁太郎 「だけどさあ、自分で言いだしといてなんだけど、

会社やつてくつてのはそれなりに…」

善太郎 「大丈夫だ。なんかあつたら、兄ちゃんがついてる」

写真に目を戻す仁太郎

仁太郎 「とか言って、いつも苦労するのは俺だったよな。なあ兄貴」

仁太郎が振り向くと、そこに善太郎はいない。

仁太郎 「……」

仁太郎は、ファイルを机に置くと、何かを書き始めます。

時々手を止めますが、決意して書き続けるのです。

そこへ、善太郎がやってきます。

善太郎 「ちよろいな！ 簡単に騙されやがって…仁太郎」

善太郎は仁太郎の書いている書類を見つめます。

善太郎 「これは…おい仁太郎！ お前何しようとしてるのかわかつてるとか！？」

書き終えた仁太郎は、懐から印鑑を出し、その書類に印を押そうとします。

善太郎は思わずその手を止めます。

仁太郎 「…？ あれ？…あれ？」

仁太郎は必死で印を押そうとしますが、善太郎は阻止します。

そうやつて問答をしている間に、松下さんが入つてくるのです。

松下 「すいません…仁太郎様？」

仁太郎 「ぐぬぬぬぬぬ」

松下 「どうしたんですか」

仁太郎 「いや、なんかその…」

やがてその手はクルリと回り、松下の額にハンコを押します。

仁太郎 「…」

松下 「…これは、なんでしょうか？」

仁太郎 「あああああッ！すみません！私もどうしてだか！」

松下 「私何かお気に触ることでも？」

仁太郎 「違います違います！すみませんこっちに洗面台ありますんで」

仁太郎は慌てながら松下を連れて行きます。

善太郎 「（手を見て）…あれ？お？おお？」

善太郎は、仁太郎が残していくた書類やペンを持つてみます。触ることに感動する善太郎は、遺影を自分の笑顔のものと取り替えます。

善太郎 「うん！…（悪い顔）よおーし！」

善太郎は出て行きます。

## 一八場

入れ替わりに和美が入ってきます。

和美 「社長！…どこいったんだろう」

和美は机に開きっぱなしの書類を見つけます。

和美 「（読んで）…これは…」

そこへ、死神の声が聞こえきます。

死神の声 「見つけたーーー！」

和美 「…！」



死神 燈子 「……そういうわけで、燈子さん！」

死神 燈子 「何ですか？」

死神 燈子 「善太郎さんがスムーズに成仏するために、  
彼の願いを出来る限り叶えてあげましょう！」

死神 燈子 「いい加減にしてよ！」

死神 燈子 「燈子さん」

死神 燈子 「なんであたしがこいつの願いなんか聞かなきやならないの？」

死神 燈子 「いやでも……」

死神 燈子 「こいつの願いなんか単純よ。お母さんにもう一度会うこと」

死神 燈子 「そうでしょ？ だつたらいいじやない。向こうでもう一度、

死神 燈子 「夫婦水入らずで暮らせば？」

死神 燈子 「燈子さん……！」

死神 燈子 「本当は私が……」

死神 燈子 「そこまで言いかけて、燈子は言葉を止めます。

死神 燈子 「お願いだから早くいなくなつて！」

死神 燈子 「燈子はそのまま出て行きます。

死神 燈子 「あ、ちょっと燈子さん！」

死神 燈子 「死神は、思わず燈子を追いかけていきます。

死神 燈子 「一人になつた善太郎は依子の写真を手に取ります。

善太郎 「……依子。俺もそつちに行くことになつた。  
ごめんな、約束守れなかつたかもしれない。

死神 燈子 「やつぱりそばにいない方が良かつたのかもな。  
あの子は、どんどん君に似てくるよ。

死神 燈子 「仕草も、笑い方も、文句言うときだつて。

死神 燈子 「君を見てるみたいで、俺は……俺はもう。  
後で聞かせてくれよ。どうして君の方が死んだんだ」

## 一九場

死神 燈子 「そこへ、仁太郎が汗を拭き拭きやつてきます。

死神 燈子 「やれやれ……やつと取れた（座つて）あれ？ 書類が？」

死神 燈子 「和美が飛び込んでいます。

和美  
仁太郎 「社長！」

和美  
仁太郎 「おう、和美君！調子は……」

（契約書を突きつける） どういうことですか！」

和美  
仁太郎 「……それは……」

「この契約が本当なら、リゾート施設が赤字になつたら、全部を投資した人間が補うことになります。危険すぎますよ！」

和美  
仁太郎 「大丈夫だよ！ 絶対に成功するから！」

「そうそう、この後明石社長がいらっしゃるそうなんだ」

「こんな時に何言つてるんですか！ それに、それにこれ！ 三島大社も潰すつもりなんですか！」

和美  
仁太郎 「それがなんだって言うんだ」

「あの神社がどういう物がお分かりですかね！」

和美  
仁太郎 「ああ……解つてる。もともとは私たちが遊んだ場所だ。

和美  
仁太郎 「昔はただの森でね。不思議な力があるって母ちゃんも兄貴も言つてた」

「子供の頃どんな病気や怪我も、あの森で遊び回つてるうちに治つたつて」

和美  
仁太郎 「ああ……イオンが大量に出てるとか何とかでな」

「それを、会長は、依子さんの療養のために残してあつたんでしょう？」

「森だけじゃなくて神社で祀れば、ずっと残しておけるからって。

仁太郎 「死んだ人間の事をいつまでも蒸し返すな！」

会長にとつてあの森は、依子さんとの……それに社長との思い出なんですよ！」

仁太郎 「死んだ人間の事をいつまでも蒸し返すな！」

「兄貴だつてもう居ない！」

善太郎 「……」

仁太郎 「子供の頃からそうだ。兄貴は正しくて、私のために何でもしてくれる。

外面は良かつたからな。でも確かにそうだよ。いい兄貴だつたよ！」

善太郎 「私は兄貴の影を踏んで歩くだけ。……兄貴は私の事を見下してた」

「バカ言うな」

仁太郎 「今だつて、見ろあの憎つたらしい――（遺影を見て） うわああああッ！」

「？」

仁太郎 「笑つてる！ 兄さんの遺影が笑つとる！」

善太郎 「あ！」

和美 「きっと、あれが会長の本質です。いい加減でだらしない人でしたけど。

人を見下すような事は絶対にしない人です！ 善太郎：会長は言つてましたよ。

仁太郎は、俺の悪いところを直してくれる。だから安心してなんでも任せられる

んだつて。きっと一生頭があがらないつて。

仁太郎 「会長が会社でも、人生でも一番信頼していたのは、社長！ あなたなんですよ！」

少し間があつて、仁太郎の携帯がなります。

仁太郎 「はい。あ、明石社長。え？ もうお着きになつたんですか！」

直接契約の話を？ もう ですか？」

和美  
「社長……」

仁太郎  
「（和美に） …物事の進化には、スピードが必要なんだ」

和美  
「社長！」

仁太郎  
「はいぜひ——」

善太郎  
「仁太郎……」

その声に反応する仁太郎  
少しの沈黙。

仁太郎 「——お断りさせていただきたいと思います！

は？ なんで？ あはははは。

だいたい、人の家族の葬式に契約の話しに来るつてどういう了見でしようか！  
バカにするのも大概にしていたときとうございます！  
お宅様のような性根の腐った方々とお付き合いするほど  
頭のネジは緩んでおりませんので！

おとといお越しくださいこのクソ野郎！」

仁太郎は電話を切ります。

和美  
「社長……」

仁太郎 「……なんか、兄貴に恨まれそうな気がして。あーあ、勿体無いことしたな」

和美  
「（微笑む） そうですね」

仁太郎  
「会社の借金、結構大変なんだ。どうしたもんか」

和美  
「何とかなりますよ。生きてるんですけどから！」

仁太郎は善太郎の遺影（？）を手に取ります。

仁太郎 「……また邪魔された……、最後の最後まで兄貴に邪魔されたよ。

本当に迷惑な奴だ。何でだよ……何でなんだよ」

善太郎  
「仁太郎」

仁太郎  
「なんで死んだんだよバカ兄貴！」

善太郎  
「……」

仁太郎  
「勝手に死んでんじやねえよ。お前どうすんだよ？」

会社も、燈子ちゃんも、……俺も残して……！」

本当に最低な奴だよ！ 無責任で、自分のケツも拭けないくせに。  
こんなことなら、生きてるうちに一発殴つとくんだった！

どんな気分だ？ これからは全部俺が見るんだ……。

会社も、燈子ちゃんも……俺が見るから……俺が見ててやるから。

いつか、向こうに行つたら、ぶん殴つてやるんだ。

クソ兄貴……！ お前なんか大嫌いだ。……大嫌いなんだ……！」

置いていくなよ……置いていくなよ馬鹿野郎……」

仁太郎は涙をこらえきれず。

善太郎 「ごめんな」  
仁太郎 「今更……！」  
和美 「社長」

仁太郎は落ち着きを取り戻します。  
仁太郎には、善太郎の声が聞こえたのでしょうか？  
仁太郎は少しあたりを見回しますが、

仁太郎 「さあ、仕事しようか」  
和美 「……はい！」

仁太郎と和美が出て行きます。  
呆然とする善太郎。  
そこへ、死神がやってきます。

死神 善太郎 「あ、よかつた。いた」  
善太郎 「なあ、小金井さん」  
死神 善太郎 「なんですか？」  
善太郎 「死ぬと、涙は流せなくなるのかな？」  
死神 善太郎 「それとも、俺が冷たい人間なのかな？」  
死神 善太郎 「なにがあつたんですか？」  
死神 善太郎 「生きてる時に、もつと話しておけばよかつた」  
死神 善太郎 「善太郎さん？」  
死神 善太郎 「……すこし、ひとりになつていいかな？」  
死神 善太郎 「……はい」

善太郎が去ろうとしますが、

死神 善太郎 「（善太郎を磁石で捕獲）とはならない！」  
死神 善太郎 「あつ！クソ！今いけそうな感じだつたのに！」  
死神 善太郎 「同じ手が二度も通じると思ったんですか！」

そこへ燈子が飛び込んできます。

燈子 「でかした死神！」  
死神 「ありがとうございます！え？ 今、年下に上から言われた？」  
「さつさといけ死神」

死神「あの、もうちよつと敬つてもらえ…イタタタ」

胃の痛みが再発した死神。その隙に善太郎が逃げます。

「あ！ちよつと！（追いかけます）」「イタタタ…イタ…（二人の様子を死神燈子）

「あ！ちょっと！（追いかけます）」「イタタタ…イタ…（二人の様子を見ます）。すこし一人になればいい」

死神は別の出口から出て行きます。

十一場

その入れ替わりに、仁太郎と松下がやってくる。

仁太郎「先ほどは失礼いたしました」

「何い？」  
「いえ、セヨ、とひっくりましたけど、それでその……」

「はい、あの、すみません。こちらの注文表の事なんですがね」

「カタログに付属している、葬儀の要求なんです……けど」

そこへ、燈子が善太郎を磁石でくつつけてやつてきます。

善太郎  
燈子  
「何するんだよ！おいおいおい！」  
「まつたく！」  
祭壇は一面を金箔で覆い、お線香の代わりに線香花火。

両側にてまわりを書き詰めて  
IEIのハミネーションで読ること

あと…」

松下

「善太郎に小声で）こいつ……！」

燈子

流し込んでください！

「あとは、レーザー光線がほしいとか」「レーザーって」

「どうです。やつぱり無理ですね。そんな目茶苦茶な葬式」

松下 「まあ……」  
善太郎 「いや待て！ほら故人の意思を尊重します！って」

善太郎はカログをめくつて指をさします。

「動くな！」  
「（カタログを見て） …出来ます！」  
「はい？」

「レーザーも花火も、故人の方の御意志なら。なんとかします。  
いや、だけどこの内容は…大体レーザー光線つてどうやるのよ」  
「大丈夫です！ ブライダルの演出で機械はありますから！ 僕が頼んでみます」

「いやその…」

「見てみたいなーです。こんなお葬式」  
「葬式と言つていののかどうか」

「幸せな方だつたんですね。善太郎さんつて。亡くなつた後も、  
人を楽しませたいつて気持ちが伝わってきます。そうでしよう？」

「え…そうですかね？」  
「僕！ 人を幸せにしたくてこの仕事を選んだんです。

「亡くなつた人を幸せに出来たら、それつて最高じやないですか！」

「いいお葬式にしますから！ 喪主のご要望、全て叶えてみせます！  
ちょっと現場でシミュレーションしてみませんか？」

仁太郎 「そうですね。いやー彼女も冷静じやなくなつてるから…」

松下と仁太郎が出て行きます。

燈子 「一体どんな注文したのよ」

善太郎 「いいじやないか。…俺の最後の晴れ舞台なんだ。みんなの記憶に残るような、  
インパクトのある式にしたいんだよ。死んだからつて悲しまれるよりは、  
笑つて見送つてもらつた方がいい」

燈子 「…やりすぎ！」

善太郎 「人を亡くした時つてな。記憶が無いんだよ。誰がいて、自分が何してたかもな。  
俺は、忘れて欲しくない。俺の最後のわがままだ」

燈子 「母さんの事も…覚えてないんでしょ」  
「覚えてるさ。母さんの笑い方、困つた時の癖も、寝相の悪さも、  
ほんの少し見せる仕草も。（燈子を見つめる）」

燈子 「なに？」  
「いや…そういうや、お前とこんなに話すのは久しぶりだな」

善太郎 「…生きてる時より死んだ後の方が沢山話してるなんて」

善太郎 笑顔の写真をとり

善太郎 「な、やつぱり遺影はこれがいいんじゃないか？」

笑顔だし。大きさもちょうどいい」

燈子 「何やつてる時の写真？」

善太郎 「これは：お前が生まれた時に病室から仁太郎を突き落とした後のだ」

燈子 「本当に何やつてんのよ」

善太郎 「あ、コレも飾つていいか？」

燈子 「それお母さんの写真じゃない」

善太郎 「いいじやないの、ひな祭りみたいで。男雛と女雛っぽく」

燈子 「祝つてどうすんの」

善太郎 「自慢したいの！俺にはこんなきやわいいカミさんがいたつて

燈子 「つたくもう：」

善太郎 「大体普通通りじやあまりにも華が無い。ただでさえ重苦しい空気だつてのにさら

に悲しくなつてくるじやないか」

燈子 「いや、お葬式つてのはそういうもんだから」

善太郎 「いいじやないか、大事な物を添えるんだ。最後くらいわがまま言わせてくれよ」

燈子が善太郎の写真を飾ろうとした時、何かに気付いて額縁を外す。

中からすこし昔の写真を見つける。

それを開いて、燈子の表情が変わる。

善太郎 「どうした？」

燈子 「いや……なんでも。私の昔の写真で、（周りの写真を眺めて）少ないなつて」

善太郎 「三島大社にある」

燈子 「え？」

「お前、小さいころものすごい高熱で死にそうになつたんだ。  
おばあちゃんなんて、山向こうの土地神さんまでお百度詣りにいつたんだぞ？」

で、お前が治つて。

燈子はかわいいから、山の神様に狙われてるんだ！つてさ。

昔はあちこちにあつたんだよ。攫われないよう子供を隠すつて風習」

「それで？」

「ま、すぐお百度できるように神社も作つたことだし、  
お前が大人になつたら見せようつてさ。

まあ、一枚くらい母さんが持つてたかもしれないけどな」

善太郎は後ろを向き、並べられた写真を眺める。

善太郎 「（振り向かず）燈子……俺は、どんな風に死んだんだ？」

燈子 「……」

「（振り向かず）よく覚えてないんだ……一人で釣りしてて……」

「転んで、頭打つたんだつてさ」

「そうか……でかい引きだつたからなあ」

「私の事、誘つたよね。電話で」

善太郎 「ああ」

燈子 「あの電話に出てたら……」

善太郎 「トーコ……」

燈子 「私が……もし行つてたら……そしたら！」

善太郎 「燈子……そんなこと……いうのはやめなさい」

燈子 「お母さんの時だつて……私がもつと早く家に帰つてたら」

善太郎 「あれは仕方ないことだ」

燈子 「でも……本当は皆そう思つてる。母さんと喧嘩して……家出して……アンタだつて

本当は——」

善太郎 「だから、俺と話すの止めたのか」

燈子 「……私、本当は……、病院で……」

善太郎 「（クスッと笑う）なんだ……そんなことか……バカな娘だなあ……」

燈子 「ちょっと！」

善太郎 「何度も言つてやる。お前はいい娘じやなかつた」

燈子 「善太郎……！」

善太郎 「だからせめて、いい母親になれ。お前ならなれるさ」

燈子 「……気が済んだら……、逝くの？」

善太郎 「そうだな。後のこと、任せたぞ！」

燈子 「どうすればいいのよ」

善太郎 「自分で考えろよ」

燈子 「解らない」

善太郎 「？」

燈子 「私、頭悪いし、特技だつて無いし、仕事だつて……」

何だつてそうだよ。私に出来る事なんかないんだ」

善太郎 「燈子」

「どうせ私なんか、何やつたつて駄目なのッ！」

「そうよ……やっぱり、アンタより私が死ねばよかつた」

「……甘つたれた事言つてんじやない！」

燈子 「……！」

「……何やつても駄目だ？ お前が何をしてきたつていうんだ！？」

何かに本気で挑戦した事あるのか？ 負けて悔しいつて思つた事あるのか？

家族を持つた事があるか？ 誰かを本気で愛した事があるのか？

……親になつた事があるのか……？」

燈子 「……！」

「お前がやつたことが無いことなんてまだまだいくらもあるんだよ！

俺の半分も生きてないくせに、解つたような口をきくんじやない！」

間

燈子 「……初めてだ……怒られたの」

善太郎 「失敗したつていいじやないか。人間はな、失敗するよう出來てんだよ。

俺なんかひどいぞ？ 人生で失敗しなかつた事なんて、たつた一つしか無い」

燈子 「何？」  
善太郎 「…母さんと一緒にになった」

依子の写真を見つめる善太郎

善太郎 「素敵な人だった。…もうちょっと、一緒にいたかったんだけどな」

## —十一場—

照明が消える。  
依子の写真だけが照らされる。

(回想…病院)

心電図の機械音。

地明かりが落ちて、クロスで依子の遺影だけが照らされる。

(医者) 「心不全です。肺炎からの合併ですね。血液の浄化が出来なくなっています」

(善太郎) 「今は眠つてるんですか？」

(医者) 「これね。ポンプの力で、目一杯血液を回してます。肺も、機械で…」

(善太郎) 「…、それ…」(これが…？それじや…)

(医者) 「最後の時間です。今のうちに、親しい方にはご連絡を。

(ぼそりと) 申し訳ない」

遺影消えて、薄暗く照明が上がる。

背中を向けて、電話をかけている善太郎。

燈子は、うつむいたまま動かない。

善太郎 「ああ。うん。雨の中で、倒れとつた。なかなか戻らんから心配しどつたんやけど。娘がちょっととな。向こうの家には知らせた。難しいらしい…。」

今夜…もう…、難しいって…もうダメなんやつて…」

心電図が、その役目を終える。  
力なく顔を上げる燈子

善太郎 「…依子…心配するな。俺、強くなるから…あの子の事、ちゃんと守るから。  
心配するな…」

元に戻る。

—十一場—

善太郎 「心配するな、お前なら大丈夫だ」

燈子 「……でも」

善太郎 「世界中の誰が何言つたって、俺はお前の父親で。お前は……俺の娘だ。俺と、母さんの娘なんだから」

燈子 「お母さんと、アンタの……」

善太郎 「人間は……生まれ方も、死に方も選べない。選べるのは、生き方だけだ。これは俺の経験から言える！それはもう確実に！」

燈子 「ねえ、なんで戻ってきたの？ お説教したいから？」

善太郎 「……勢いだけの人生だったからさ。こんな自分でも、少しは……誰かを幸せに出来たかなあって思つてな。

誰も悲しんでなかつたらどうしようつて心配で。でも俺は……本当に……いい人生だった……」

燈子 「お父……」

燈子が顔を上げる

しかし、善太郎の姿がもう見えないらしい。

燈子 「善太郎……？ ねえ！」

善太郎 「燈子？」

善太郎を探し続ける燈子。

そこへ、正装した死神がやつてくる。

善太郎 「……もう、見えないのか？」

死神 「未練を果たしたからですよ」

善太郎 「（納得）……無理言つて悪かつたね」

死神 「今回だけですかね」

善太郎 「……妻が亡くなつてから、不安だつた。あの子をちゃんと育てていけるのか。俺……危なかつたかもしれない。父親業つて難しくてね。これじや、妻にあつちで怒られるかな」

死神 「お待ちですよ。2LDKの天国で」

善太郎 「そんなに広いんならもう一人作ろうかな」

死神 「（笑う）」

笑みを漏らす善太郎。

善太郎 「どうどう……父親とは呼んでもらえなかつたか」

死神 「彼女の人生はまだまだ長いです。いつかわかつてくれますよ」

善太郎 うなだれる燈子に近づき

善太郎 「じやあな。先にいつてるぞ。…バカ娘」

善太郎 心を決めて死神に目配せし、死神の後をついていこうとする。 その去り際に、

燈子 「お母さんによろしく……バカ親父…

音楽が始まる。

凍り付いたように動かない善太郎。

涙をこぼすが、死神に肩を叩かれ、満足したように笑みを浮かべる。

その善太郎を優しく促す死神。

善太郎は、死神の励ましを受けて立ち上がる。

死神が仕草をすると、壁（もしくは舞台の出入り口）に光の扉が現れる。

一瞬眩しそうに目を閉じる善太郎。

目を開くと、光の先に懐かしい顔を見つける。

善太郎 驚きと嬉しさと照れくささが入り混じった表情で微笑む。

その口が動くが、声は聞こえない。

善太郎 「（……來てくれたのか…）」

善太郎 あらゆる不安から解放されたような優しい笑みのまま、まっすぐに光の中へ。それを見届けた死神は、燈子向かって丁寧にお辞儀をして光の中へ。照明が地明かりへ。

燈子 一瞬だけ何かの気配を感じたように振り向くが、すぐに誰もいない事に気づく。ポケットに入っていた紙を取り出して開き、善太郎たちの写真の間へ飾る。

それは『わたしのかぞく』と大きく書かれた、子供の落書き。

そこへ、仁太郎が和美を引き連れてやってくる。

どうやら反省しているらしい和美。後ろからは早苗と和美。

地明かりがフェードアウト。

それと同時に祭壇の上に飾られた、善太郎の笑顔の写真。母親の写真。燈子の絵だけが照らし出される。そこには、幸せな家族の姿があつた。やがて、ゆっくりとフェードアウト。

終